

東 書 藝

令和5年8月

<http://www.toshogei.jp/>

第七十回記念展は大成功で幕 贈賞式・祝賀会も無事開催

令和五年四月四日～九日、

第一会場・愛知県美術館ギャラリー、第二会場・名古屋市民ギャラリー栄で開催された七十回記念展は、両会場で二千六百七十三名（前年比百三十一%）の来場者を迎え大成功のうちに幕を閉じた。新型コロナウイルス感染拡大が漸く落ち着きを見せ始め久しぶりの開放感が少しある。

初日、第一会場での開場式では風岡五城会長挨拶の後、中日新聞社事務局次長・古田真一様をお迎えして、テープカットが行われた。今年には贈賞式と祝賀会が最終日の開催となったので、初日の鑑賞をゆつたりと楽しむ様子の愛



総領事楊嫻先生

好家が多かった。

好評のうちに迎えた九日の最終日。名古屋ガーデンパレスで贈賞式と久しぶりの祝賀会が挙行された。主催者として風岡五城会長、中日新聞社・古田真一事務局次長の挨拶の後、厳かに贈賞は進み大賞受賞・酒井奏風さんによる喜びのことが高らかに読み上げられた。続いての祝賀会では大村秀章愛知県知事・名誉会長、江崎鐵磨衆議院議員・名誉顧問秘書様、中国駐名古屋総領事楊嫻先生、五禾書房代表桑原喬様の方々より有難くご祝辞を賜った。その後乾杯の後歓談、上位受賞者の披露、記念撮影と、どのテーブルでも笑顔が弾け七十回記

念展への努力が結実して疲れも吹き飛んだ気がする。今展の成功に尽力されたすべての皆様に、感謝の気持ちを届けたいと思う一日であった。



第一会場



開場式・テープカット

訃報

本会常任参事で書作研究・好日社代表の岩田冬崖先生が、六月二十日にご逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。

会報では追悼の記事を次号に掲載させていただきます。



風岡五城会長

東海書道藝術院作品抄録

令和癸卯歳首

白兔紫毫

愛知県知事 大村 秀章 書

愛知県知事 名誉会長 大村 秀章

紫庭燒出
霜如雪君
汲川流我
於新

会長 風岡五城



鑑賞される大村名誉会長

至周杉色千花満
竹一泉勢百道飛

副会長 安藤清舟

副会長 安藤清舟

百五七百六

常任参事 故岩田冬崖

常任参事 谷口竹城

常任参事 松浦白碩

去勢節白晚来急

常任参事 水谷紅楓

石教自可樂楮紳賢行道
何必學理紅吹山對遠言

常任参事 西尾邑城

傳命身自自
常任参事 木村大澤

理事長 木村大澤

響不辭聲

〈上位受賞者作品〉

會員の部

丞相祠堂何處尋錦官城外柏森：暎階碧草自
 春色隔葉黃鸝空好春三顧頻繁天下計兩朝開
 濟先臣心出師未捷身先死長使英雄淚滿襟

大賞 酒井 奏風

數年間 卷九の如く四部 佐倉藩 暖室 落し 初月
 未幾 夕 暎 暎 不 過 奈 落 除 未 秋 外 僅 火 樹 右 頭 峰 心
 清 心 因 冥 經 初 行 皆 似 潮 起 終 心 過 可 至 矣 山 侵 俄 衆 隨
 柳 入 倉 庫 日 行 信 相 贈 存 十 年 何 存 志 實 志 情 一 言 誠 心 也

準大賞 伊神 曉風

雲想衣裳花想容春風拂檻露華濃若非羣玉山頭見合向瑤臺
 月下逢燕草如碧絲秦桑低綠枝昔君懷歸日是妾斷腸時春風
 不相識何事入羅帷江城如畫裏山曉望晴空雨水夾明鏡雙橋
 落彩紅人煙寒橘柚秋色老清柯念此上臨風懷謝公

知事賞 牧原 青桐

通與野情徑千山高復淺好峯隨寺出
 幽徑獨行遠霜落熊升樹林空鹿飲溪人
 歸 寺 鐘 鳴 宿 鳥 歸 林 空 鹿 飲 溪 人 歸

總領事賞 毛利 天岳

象 不 尋 象 僅 一 冲 人 未 試 唯 一 本 注 釋 為 生 科 任 橋 亦 於
 象 半 半 惟 亦 爭 然 向 左 船 乘 舟 向 左 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 亦
 亦

中日賞 松浦 白沙

東書藝賞 北河 光春

準會員の部

中天積翠五臺遠上帝高居降節朝迷
 有馮夷來擊鼓始知贏女善吹簫江光
 隱見蕊蕊巖石勢參差危鷲橋更肯
 紅顏生羽翼使應黃髮老漢樵

市長賞 小田 恵美子

修竹想高致蒼蒼世所安軟塵塵不到
 一鶴伴吟詩湘雲墜生處陳德意滿保傷
 却憶陽陽亭終日催煙雨

市教委賞 若宮 舞奏

夜雨深館靜苦心多卷前雲陰留翠沾
 螢影傍華編夢鳥書清溪通徑仍
 妙幸何愁丹穴鳳不飲玉池泉人觀云

中日賞 川村 大觀

星雲翻星未遠白而跳珠亂入輕卷地風木息
 吹散望湖橋下水笑梨花淡白柳深青柳絮
 飛時花滿欄北東欄一樓雪人生者得幾秋

中日賞 水野 陽雲

幸之太湖之鏡見五湖若与時能界海
 多然不為食山川 迷道路伊洛皆風
 蒼之白帝亦別但為海人

東書藝賞 荻野 陽華

東書藝賞 荻野 陽華

東書藝幹部による 第七十回展 私の選んだこの作品

今年も会長以下幹部の八名の先生方に、賞の対象とならない院人（常任理事以上の役員を除く）の中からご自分の社中以外でこれと思う秀作を、六点選んでいただいた。その方々の氏名と作品写真、内二作品の講評を紹介します。（敬称略）

風岡五城会長

①三谷 小京

「雲開万壑春」の一句を草書を主体に一気呵成に書き下す。正に老練の技。筆の開き、渴筆のおもしろさも見どころ。

②平田 美泉

構えたところがなく、自然に成るの風趣あり。しかし、決して単調ではない。今後どう変容していくか楽しみである。

③山本 美峰

④長谷川雅江

⑤澤 麗水

⑥横井 青蓮

安藤清舟副会長

①須藤 春華

杜甫詩五絶。運筆に迷いなく、悠々と引かれた筆線お見事。三行目の落款も正しく揮毫され、一層完成度の高い作品となっている。

②石山 荷心

三×三尺方形の中に、世阿弥風姿花伝の一節をテーマとし、「花」を強調した奇抜さに驚きを感じさせる快作。

③城田 桑軒

④三村 菱花

⑤北原 竹堂

⑥遠山 穂光

岩田冬崖常任参事

①立松 勝

自由奔放、長鋒筆を駆使しての近代書作品。リズム感溢れる線条に好感。

②大山 湯泉

③橋口 賢岑

④梶 蘇山

⑤八木 一華

⑥金子由美子

谷口竹城常任参事

①布目 一路

爽やかな淡墨の美しい連綿

作品を見せていただきました。

②飯田 松華

静けさ、落ち着き、充実を感じました。

③仙田 秋来

④小山 豊泉

⑤角脇 松園

⑥鳥居 玉香

西尾邑城常任参事

①岩崎 青玲

張猛龍碑の臨書。臨書を選ぶのはどうかと思ったが、線質よく練れて良し。この書を根拠とした、この先の自運の作品が楽しみである。是非自運の書を。

②小川 若紫

画数の少ない四文字を、大胆に「天馬」を引き締め「行空」を伸びやかに表現した。練度の高い線質で見事。

③賀田野春汀

④中根 冬泉

⑤伊藤美どり

⑥高橋 雅

松浦白碩常任参事

①岩井 玲翠

行間の余白を美しく見せ、筆は軽快に動いて文字の小を織り交ぜながら整然と纏められている。躍動感が見事。

②三谷 小京

シンプルな造形を巧みな筆捌きで力強く書き上げて、

特に後半の渴筆に妙味あり。熟練の線に感銘を受けた。

③杉原 和香

④清水 玲飛

⑤千田 嘉穂

⑥服部 草心

水谷紅楓常任参事

①畑中 花影

大胆な運筆で堂々たる書きっぷり。鍛えられた修練の跡が見える素晴らしい作。

②内海 清秋

悠々と書けて、長年の書に向き合う意気が伺える。充実感溢れる隸書作で見事。

③角脇 尚園

④豊田 月花

⑤柴山 三華

⑥岡田 静嶺

木村大澤理事長

①三谷 小京

線の立体化を図りながら、流動感の表現も鮮やか。生命力溢れる心揺さぶる書。

②須藤 春華

豪快かつ勢いあり。線が生き生きとして見応え十分の作。

③畑中 花影

④佐野 小徑

⑤伊藤 一楓

⑥藤枝 静香

(5)

心秀樸又
憂夕性厭
出霞神中
壁映峰市
人寒奈喧
露永香初
夕陰雅起
期雲石山
苔松門廢
口院草靜
耕殘震歸
母悅並飲
雲岸寒靈
終後懸漢
南庭寒泉
運燕露怡
遊滋秋
客嗽涼

風岡選 澤 麗水

湖光秋月兩相和
潭面無風鏡未磨
遙望洞庭山水色
白銀盤裏一青螺

劉禹錫《望洞庭》

水谷・木村選 畑 中花影

遲日江山麗
春風花草香
泥融飛燕剪輕盈
沙暖鵝鵝暖鴨香

杜甫《絕句》

安藤・木村選 須藤 春華

西原驛路桂枝頭
客散江亭雨未休
君去試看沙水上
白雲猶似漢時秋

梁國日暮亂飛鴉 月滿係三兩家 庭樹不知人去盡 落花猶似逐春歸

谷口・水谷選 角 脇尚園

雲一牙

風岡・松浦・木村選 三谷 小京

去來傷行樂 處處見春歸
白銅製酒樽 日深多
若月使个出
山公神 必時動 打
出陽下 顏太白 持
酒到 著手
臨風 醉水 綠沙
如雪 著
酒 淡 醉
青 言 久
塵 滅 且
若有 東 池 暮 首
傾 遠 碑 山 公
欲 上 馬 笑 笑
教 家 陽 兒 李 青
山 詩 意 年 上

安藤選 城田 桑軒

李白詩句
東月 中 吟

李白詩句 東月 中 吟

安藤選 北原 竹堂



第一会場



第二会場



李白詩句
日照錦城頭
朝光散表樓
青蓮到於今年
堂前雨下

風岡選 橫井 青蓮



風岡選 長谷川 雅江

白馬金鞵遠
依東羅帽側
社外風落月低
軒窗燭盡飛
花入戶
笑片空對
鏡不覺
寒衣
醉 起步
溪月
馬還
人六
稀

風岡選 平田 美泉

不知香積寺
數里入雲峰
古木無人徑
深山何處鐘
泉聲咽危石
日色冷青松
蒼苔空潭出
白鳥下林逢

安藤選 遠山穂光

對しへて
心は
わづらひ
て
あはれ
なり

岩田選 立松勝

寒郊桑柘稀
秋色曉依之
野燒侵河斷
山鴉向日飛
以於樵樵去
荷鍾刈田婦
秣酒家之
熟相邀白舟

安藤選 三村菱花

不亡多林
不覺
松竹
蒼苔
空潭
白鳥
下林
逢

岩田選 橋口賢岑

臨湖門外是
佛家郎
不聞啼
末噴
屬黃
出築
端茅
蓋屋
門前一
樹
樂
新
花

岩田選 大山湯泉

群岫碧摩
天逍遙
不記
丰撥
露尋
古道
倚樹
聽流
泉蒼
暖青
牛臥
松高
白鶴
眠語
來江
色暮
獨自
下寒
煙

岩田選 八木一華

兼會何
處有
以
分
香
可
收
海
自
早
繁
陰
處
未
不
飛
去

岩田選 梶蘇山

只道梅花
散柳
新枝
總似
紅葉
自用
素紫
紅
可
驚
黃
新
不
驚
方
澤
有
應
老
去
霸
主
遊
人

谷口選 飯田松華

空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く
空の如く

岩田選 金子由美子

香枝無處
不飛
花寒
食東
風柳
斜日
暮
薄宮
博蠟
榻青
煙散
入
空
家

谷口選 小山豊泉

親明帝初中西中郎將使持節平西將軍涼州刺史
 史瓊之十世孫八世祖軌晉惠帝永興中使持節
 安西將軍護羌校尉涼州刺史西平公七世祖素
 軌之第三子晉明帝太寧中臨羌郡尉平

西尾選 岩崎青玲



西尾選 伊藤美どり

我居知子日也... 依人亦不能忘... 故為我...

谷口選 布目一路

此物以濃... 如精... 故...

谷口選 鳥居玉香

銀價... 自... 益...

谷口選 仙田秋來

長安... 燭... 會... 早...

松浦選 岩井玲翠

堂前撲案任西鄰無食無見一婦人不為困窮有此
 枉緣恐懼轉須親即防遠客雖多事便抽跡難
 却甚真已許微求貧到骨正思戒馬淚盈巾

西尾選 中根冬泉

若... 輕... 映...

西尾選 高橋雅



西尾選 賀田野春汀

天馬... 天馬行...

西尾選 小川若紫

江南佳麗地金陵帝王州
遙遙葦花綠水遠遶起
朱樓飛鳥黃雲馳道長楊
蔭御溝凝結露翼高
蓋疊敷道長年轉歡納
堂喜表功名區可收

松浦選 清水玲飛

松浦選 杉原和香

正馬行將夕途去轉難不知邊地別
或訪客衣筆淡冷泉聲若山
空不業乾莫言聞客極兩宮猶漫
唯君此別意何如駐馬廟以聞
請居玉頃味依數汗波衝陽輝
病我知書青楓江上秋又逢
白帝城邊古水波聖代即今多
而露暫時不予莫躊躇焉
送許云云

松浦選 千田嘉穗

名花傾國兩散在
白雲常笑不能離
春風無恨在
他處尋芳
不若雲
愁不覺
春如夢
去此
佛樓
雲雨
水雲
到雲
雲
獨發
春
逢
雲
拂
玉
袖
上
馬
啼
紅
鞍
白
日
邊
之
白
雲
如
地
雲
云

松浦選 服部草心

山書園
其
畫
豈
但
是
素
然
幽
谷
得
之
漢
春
月
無
雲
際
虛
敵
四
體
善
琴
磬
一
室
虛
吹
尔
莫
人
雲
者
能
忘
倚
藥
動
云

水谷選 内海清秋

案牘閒清畫歌謠
遍里閭光風回細柳
甘雨洗嘉蔬遺興杯
中物消愁几上書
所期民物卓此外
復何求

予臨新舊自取李清秋之

竹迳從初地蓮峯半
出化城窓才三楚
畫林上九口平墩
草承踏坐長松偃
蒼龍
只
在
江
之
外
觀
者
得
之
無
生

水谷選 岡田靜嶺

水谷選 柴山三華

雲
想
帶
介
裳
華
想
問
晉
扇
拂
櫻
雨
霽
鬱
濃
芳
菲
羣
亞
山
頭
貝
會
向
瑤
台
月
下
輝

文白中體衣裳花想帶晉扇不歡或華一濃若非群一玉頭是念山瑤台月下輝三華一七

水谷選 豐田月花

嵐霧今朝重江山
此地深澗聲秋更
急峽氣曉多陰望
一莊雲遮眼思鄉
白
滴
心
將
何
慰
幽
獨
賴
此
北
窗
碧
云

木村選 伊藤一楓

黃怪頻過有酒家
多情長是惜年
不
好
去
風
堪
賞
還
堪
恨
終
已
可
甲
花
又
不
色

木村選 佐野小徑

渡
江
柳
意
密
香
驛
外
不
傳
舊
事
而
年
年
對
子
餘
生
更
有
在
醉
清
沙
於
愁
愁
無
處
不
侵
向
海
易
橫
空
向
海
崖
古
在
無
愁
愁
愁
愁
愁
愁
愁



大村 秀章 名誉会長



五禾書房 桑原 喬様



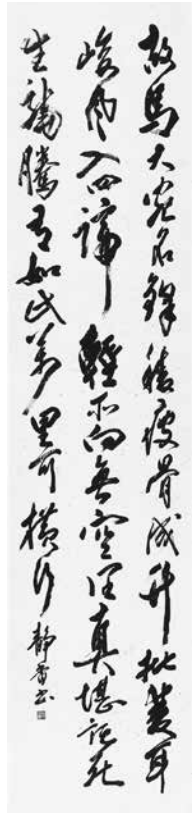
安藤 清舟 副会長



風岡選 山本美峰



安藤選 石山 荷心



木村選 藤枝 静香

◆会員の部 大賞



酒井 奏風

- ① 鄭道昭。
- ② 運筆。
- ③ 白黒のバランス。筆遣い。
- ④ 側筆気味の癖を直し、技量を磨きたいです。
- ⑤ 人生の一部。書道を通して出逢えた人、経験できたことが宝物です。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、



大賞・喜びのこぼれ

誠にありがとうございます。日頃よりご指導くださる先生方のお蔭と、深く感謝しております。この賞を励みにより一層精進してまいりますので、引き続きご指導の程よろしくお願い申し上げます。

- ① 現在学んでいる古典は。
- ② その古典のどこに魅力を感じていますか。
- ③ 今回の出品作で、制作上特に大切にしたいことは。
- ④ (受賞を機に) これから挑戦してみたいことは。
- ⑤ ご自身にとって「書道」とは。
- ⑥ 受賞の感想と今後の抱負。

今年も栄えある賞に輝いた皆さんの中から、会員・準会員の部の上位入賞十二名の方々にアンケートをお願いしました。設問内容は次のとおりで、受賞作品は三頁に掲載しました。

第七十回東書藝展 受賞者に聞く

◆会員の部 準大賞



伊神 暁風

- ① 高野切第一種。
- ② とにかく見飽きない美しさ。
- ③ 自分が書きたいと思う表現を求めつつも、独善に陥らないよう心掛けました。
- ④ 臨書したい古典、挑戦したい書体、やってみたいと思う事ばかりです。
- ⑤ 書は漢字文化圏に生まれた者に許された最高の芸術の一つで、これに携われることは至高のよろこびであり、かつ誇りです。
- ⑥ この度は素晴らしい賞を賜り、誠にありがとうございます。故小川圭南先生、松浦白碩先生から教え切れないほど多くの教えを頂き、さらに諸先生・諸先輩方に支えられここまでやって来られました。これからも一層精進して参ります。



◆会員の部 知事賞



牧原 青桐

- ① 魏霊蔵造像記など、北魏の書。
- ② 力強さ、字形。
- ③ 文字の大きさ字間・行間のバランス。
- ④ 北魏楷書の学びを、作品づくりに活かしていきたいです。
- ⑤ 静かに心を落ち着かせて書道に向き合い、新しく学んでいく事が楽しいと感じます。今後も日々勉強だと思っています。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。驚きと喜びを感じております。これも日頃より熱心にご指導下さる壁谷桔華先生のお蔭と、深く感謝申し上げます。そして、幼少の頃より始めたお稽古を今日まで続ける事ができたのは、家族の支えがあったからだと思っております。今回の受賞を機により一層精進して参りますので、今後ともご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

◆会員の部 総領事賞



毛利 天岳

- ① 蘭亭序。
- ② 流れるような線、表現の豊かさ。
- ③ 詩の意味に留意しながら前後の文字の繋がりを意識すること。
- ④ 基本を忘れる事なく様々な古典を学び、書技の向上を目指したいです。
- ⑤ 書技の向上だけでなく、集中力を高めるなど自分を磨く重要な時間です。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。日頃よりご指導くださる水谷紅楓先生に心より感謝申し上げます。より一層精進して参りますので、今後ともご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

◆会員の部 中日賞



松浦 白沙

- ① 高野切。
- ② 明るさ、典雅、爽快。
- ③ 墨色、文字の太細、かすれ。
- ④ 篆書、小篆。
- ⑤ 墨の香りを楽しみながら、心を落ち着かせる事ができる場。
- ⑥ この度は第七十回展の節目の中で、このような賞を頂け

◆会員の部 東書藝賞



北河 光春

- ① 書譜。
- ② 自由で変化に富んだ運筆。
- ③ 伸びやかで勢いのある線の全体のリズム。
- ④ 篆書、隸書。大きな文字の作品に挑戦したい。
- ⑤ 自分を俯瞰して見る時間。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂きありがとうございます。一時筆を持つ手が止まりました。今回の受賞はとても感慨深く思います。これまで温かく見守って下さった松浦白碩先生、諸先生方に感謝申し上げます。心機一転、今後も書と向き合って参ります。

るとは思ってもいませんでした。これも日頃より熱心にご指導下さる、伊藤春魁先生のお力添えによるものと感謝しております。これからも良き師のもと、良き仲間と共に楽しく取り組んでいきたいと考えています。

◆ 準会員の部 市長賞



小田 恵美子

- ① 北魏の書の孫秋生造像記、楊大眼造像記。
- ② 力強さと線の鋭さ。
- ③ 龍門のような力強さ、勢いのある線となるよう運筆し、字間をそろえること。
- ④ 北魏の他の作品も臨書することを通し、力強さと鋭い勢いのある線を追及したいです。
- ⑤ 夢中になれる大好きなこと、大切なもの。書くことで自分の心と向き合えます。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。これもひとえに日頃より熱心にご指導下さる壁谷桔華先生はじめ、宏道書会の先

生方のお蔭と心より感謝申し上げます。書を通して出会えた仲間に感謝し、学び、刺激を受け、楽しみながら一層精進して参ります。これからもご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

◆ 準会員の部 県教委賞



前田 沾泉

- ① 呉昌碩。
- ② 力強く味わいのある線。
- ③ 作品の構成。
- ④ 集字をした後、文字の大きさや配置等を工夫し、創作の幅を広げたい。
- ⑤ 人生を楽しく彩ってくれるもの。
- ⑥ 県教育委員会賞を受賞させて頂き光栄です。日頃よりご指導下さる羽根田菖橋先生、菖風先生に心から感謝申し上げます。また、七十回もの展覧会の歴史をつなぐためにご尽力下さった先生方、本当にありがとうございます。頂きました。頂いた記念誌を見ながら、改めて書の素晴らしさを感じています。

しかし同時に、自分の未熟さも痛感しました。今後はより一層精進して参ります。これからもご指導をよろしくお願ひいたします。

◆ 準会員の部 市教委賞



若宮 舞奏

- ① 高野切第一種、張瑞図。
- ② 墨の濃淡の変化、連綿の美。
- ③ 前半畳み掛ける勢いで、後半渴筆の部分は軽くりズミカルに書くことを心掛けました。
- ④ 張瑞図の書法を勉強して、大字仮名に活かしたい。
- ⑤ 心を表すもの。
- ⑥ この度は素晴らしい賞を頂き、ありがとうございます。いつも優しく丁寧に指導下さる伊藤春魁先生はじめ、梓会の先生方、明るく温かい教室の先輩方、近くで応援してくれる家族や友人、皆に支えられての受賞でした。幸せな気持ちで書に向き合うことができます。皆様のお蔭と心より感謝申し上げます。仕上がり

が近づくにつれ気持ちがあぐつと入って心と体が動き出し、書き終えるのが寂しくなるほど思いの詰まった作品となりました。今後は一層精進し、感謝の念を忘れず書の道を歩んで参る所存です。ご指導よろしくお願ひいたします。

◆ 準会員の部 中日賞



川村 大観

- ① 蘇軾、黃庭堅。
- ② 線質の強さと字形。
- ③ 墨量と全体の流れ、バランス。
- ④ 書の知識をもっと深め、たくさんの古典を研究して筆遣いを追及・鍛錬したい。また大きなサイズの作品にも挑戦してみたい。
- ⑤ 自身の生活にとってかけがえのないもので、人生を充実させてくれるものです。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂きありがとうございます。ご指導下さる風岡五城先生、宏道書会の先生方に心から感謝申し上げます。これを機に更に努力・精進して、

末長く書道に打ち込んでいきたいと思っております。

◆ 準会員の部 中日賞



水野 陽雲

- ① 董其昌。
- ② 形式にとられない作風。
- ③ 全体の文字のバランス。
- ④ 自身の性格が反映されるのか、厳しい線・鋭い線が苦手なので、線質を意識して練習をし、よりメリハリのある作品を目指しい。
- ⑤ 生活の一部であると同時に、日常の雑念から心を切り離して落ち着く事ができる、大切な時間です。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。また、これも日頃よりご指導下さる先生方のお蔭と、深く感謝しております。今日よりも明日、明日よりも明後日と、より一層精進して参りますので、これからもご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

◆ 準会員の部 東書藝賞



荻野 陽華

- ① 智永・真草千字文。
- ② 線の伸びやかさ、字形。
- ③ 詩（語句の意味）を出来るだけ思い浮かべながら書くように努めました。
- ④ 篆書に興味を持ち、これから学んでいきたい。
- ⑤ 他のことを考えずに没頭でき、心が落ち着きます。
- ⑥ この度は身に余る賞を頂き、ありがとうございます。また、日頃から温かくご指導下さる松浦白碩先生をはじめ、諸先生方の励ましや助言のお蔭と、深く感謝しております。今後は老化防止も兼ね、楽しみつつ続けていきたいと思っておりますので、引き続きご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。



会長・来賓の先生方

◇ 令和五年 東書藝総会 ◇

六月十八日（日）、中電ホールにて東書藝総会が開催された。

出席者百六十二名、委任状四百七通で総会は成立。司会は羽根田菖風常任理事。風岡五城会長からは、第七十回記念展を振り返り、本展が一度も途絶



えることなく続けてこられたことについて喜びと感謝が語られ、これからもお互い刺激しあったり、励ましあ

たりして東書藝を盛り上げていきました。また、木村大澤理事からは、東書藝の「藝」という字は、人間の手で草木を植える様子が成り立ちで、重要な学問の一つを表しており、「芸」とは異なる意味を持つ字であることが説明された。議長には井浪幸潭常任理事

が選出され、以下の報告・議事が承認された。

- ① 令和四年度事業報告
- ② 令和四年度会計報告
- ③ 令和四年監査報告
- ④ 令和五年度事業計画並びに予算案
- ⑤ 新役員について
- ⑥ 第七十回展による昇格者に昇格証の授与

〔公演会〕

総会後には薩摩琵琶・鯨水こすい会による琵琶の演奏が行われた。「琵琶の演奏と語り」という演題のもと、「平家物語より 那須の与二」「本能寺」「耳なし芳二」などの演目が解説とともに演奏された。

もともと、このような語りや琵琶の演奏は、合戦を前にした武士の士気を高めるためのものだから、迫力ある語りと演奏に一同魅了された。



'23 「今日の書」 代表作家展

中部圏書芸作家協議会主催

七月十一日～十六日、名古屋

市民ギャラリー栄で開催。東書藝、玄玄書作院、以文会書典社の四団体から代表作家

四十六名、東書藝は十六名の出品である。すべてを紹介したい

が、風岡五城「自詠詩」、安藤

清舟「風花雪月」、木村大澤「温

柔敦厚」、富永奇昂「鳳」、伊

藤春魁「紀貫之の歌」、山本晴

城「披腹心」、安藤餘香「歎」、

三品芳翠「黎明」が印象深い。

また故・岩田冬崖先生の遺墨

「紅樹添秋色」には胸を熱く

打たれた。(敬称略)



理事長 木村大澤



副理事長 富永奇昂



副理事長 山本晴城



副理事長 安藤餘香



常任理事 三品芳翠



副会長 安藤清舟



常任参事 故岩田冬崖

追悼 参事 佐野秀水 先生



本会参事で故、佐野秀水先生の追悼文を、門人で常任理事の近藤春雪先生に寄せていただきました。

佐野先生に感謝

常任理事 近藤春雪

佐野先生は今年二月五日に逝去され、七日にしめやかに葬儀が執り行われました。とても元気でいらつやだったので、突然の訃報に驚きました。去年の暮れに「コロナが落ちてきたので、食事に行こうね」と電話下さったお声がまだ耳に残っています。

佐野先生は安井寿泉先生に師事され、安井先生が東書藝に所属していらつや、佐野先生も東書藝に入られました。

私は小学一年から先生の書道教室に通い基礎から指導を受け、東書藝に出品するようになってからは作品の作り方、草稿の大事さを教えて頂き本当に感謝しています。書に対しては厳しい先生でしたが、それ以外の時はとても面白く明るく先生でした。足を悪くされてか

TOPICS

ら表舞台に出られませんでした。いつも東書藝の事を深く思っています。総会では参加者の皆様に黙とうをして頂き、有り難うございました。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

去る六月四日(日)、名古屋電気文化会館イベントホールに於いて、登録無形文化財「書道」特別揮毫会が開催された。主催の日本書道文化協会は、書道文化のさらなる普及・発展と継承者の育成、そして書道のユネスコ無形文化遺産登録を目指す。

当日は、鬼頭翔雲、近藤浩平、そして協会監事を務められる本会会長風岡五城の三先生が、それぞれの伝統的な書法の技を披露。舞台上での揮毫の様子は大型スクリーンに映し出され、満員の観衆はその見事な筆捌きに釘付けになっていた。



※動画配信あり

書展訪問

◇第44回宏道書会选择展

五月十六日～二十一日、栄サンシティギャラリーで開催。山本晴城代表

以下、二十八名の出品。東書藝幹部を多く有する実力派書会の小品展で、流石に格調が高い。



◇第28回無名會書展

六月六日～十二日、名古屋市民ギャラリー

栄で開催。故澤井瘦蛙先生の「歎異抄」を含め、豊かな個性を感じさせる十九点の作品が心地よく壁面を飾る。センスの素晴らしさに敬服。



渡辺清香代表

◇第64回新道書道会展

六月一日～四日、四日市市文化会館。豆子甲水之生誕百年のサブタイトルが付き、遺墨作品が多数展覧された。幹部複数出品、善光寺よりの特別出品を含め百十九点が広い会場を飾り、壮観だった。



◇2023八千代書道展

六月十七日～十八日、くわなメディアライブ多目的ホールで開催。いなべ市長はじめ特別出品作四点、会員作百一点の展示。漢字・かな・一字書・漢字かな交じりと多彩な作品がずらりと並んだ。魅力いっぱいのお展覧。



梶 蘇山代表

※第39回清和会書展、第49回宏道書展の紹介は次号に予定。

今後の予定

◇東書藝夏期一泊研修会

期日 9月3日(日)～4日(月)

会場 蒲郡市ホテル竹島

◇'23心象展

会期 9月5日(火)～10日(日)

会場 愛知県美術館ギャラリー

主催 好日社(鈴木紫舟)

◇第57回碩山書院一門展

会期 9月9日(土)～10日(日)

会場 蒲郡市民会館東ホール

主催 碩山書院(大竹翠葉) 全振興会

◇第65回記念游心書展

会期 9月12日(火)～18日(月)

会場 愛知県美術館ギャラリー

主催 游心書道会(松浦白碩)

◇第26回東書藝選抜小品展

会期 9月12日(火)～17日(日)

会場 栄サンシティギャラリー

主催 東海書道藝術院

◇第41回飯田書人会展

― 幽石書道会合流展 ―

会期 9月22日(金)午後2時～26日(火)午後4時迄

会場 飯田創造館

主催 飯田書人会・幽石書道会 (加山幽石)

◇第23回心書会展

会期 10月7日(土)午後1時30～9日(月)午後4時迄
会場 亀山市文化会館中央コミュニティセンター

主催 心書会(安藤清舟)

◇第46回梓会書道展

会期 10月31日(火)～11月5日(日)

会場 愛知県美術館ギャラリー

主催 書道研究梓会 (勝川香艸、伊藤春魁)

◇第40回記念花墨会展

会期 11月18日(土)～19日(日)

会場 三重県菰野町図書館2階

主宰 松岡麗泉

編集後記

◇故・佐野秀水、岩田冬崖両先生のご冥福をお祈りいたします。◇今号は多くの皆様のご協力を頂いて刊行でき、感謝申し上げます。七十回記念展の成功を思い起こし、次回展への力にして頂けたらうれしい。◇また記念誌は見事な出来栄で、編集実行委員の先生方、中央印刷・檜山社長の奮闘に感謝。全会員の誇らしい足跡となった。◇各地で災害級の猛暑が続く。くれぐれもご自愛ください。

令和五年八月 第一四九号

発行 東海書道藝術院

編集 加藤 松亭

堀江 龍舟